

日本詩紀拾遺 後補

後藤 昭雄

はじめに

天明六年（一七八六）、市河寛齋は『日本詩紀』を上梓した。我が国で漢詩の詠作が始まった近江朝から平安朝末期に至る漢詩を網羅することを企図した一大事業である。本集五〇巻、外集一卷、別集一卷から成り、約三二〇〇首、五三〇句を集成している。日本古代の漢詩および作者を俯瞰するのに恰好の詩集である。しかし、現在の目から見ると、その採録には多少の遺漏もあり、またそれ以上に、二百年余の時間の経過の中で、少なからぬ漢詩文資料の新たな出現があり、また公刊もなされている。そこで、私は『日本詩紀』の拾遺作業を続け、二〇〇〇年にこれをまとめて『日本詩紀拾遺』を刊行した。

その後も平安朝漢詩の拾遺を心懸けているが、ある程度の蓄積となったので、一篇を編むことにした。

『日本詩紀拾遺』以後、現在までに、ある程度まとまったものとして出現した漢詩資料は二つである（二つしかなかった）。

一つは、国文学研究資料館田安德川家寄托資料の中から見いだされた『内宴記』である。保元三年（一一五八年）正月に行われた内宴の記録で、記と詩序と詩から成るが、いずれも新出の資料である。詩は関白藤原忠通の作以下一八首である。この『内宴記』は佐藤道生氏により「田安德川家蔵『内宴記』影印」（『日本漢学研究』第四号、二〇〇四年）として公刊された。

もう一つは、『和漢兼作集』下巻である。本集は鎌倉時代中期の成立と考えられる詩歌集である。「兼作」とは漢

詩と和歌の両方を作るとの意である。本来は二〇巻であったが、いつの頃にか卷十一以下の下巻が失われ、上巻のみの零本として伝存していた。従来、本集の唯一の伝本とされてきた宮内庁書陵部蔵本（近世初期写）がそれである（『日本詩紀拾遺』はこれを採録の対象とした）。ところが、二〇〇五年、この書陵部本の親本に当たる冷泉家時雨亭文庫蔵本が影印本として公刊された（冷泉家時雨亭叢書『和漢朗詠集 和漢兼作集 尚齒会和歌』）。この本は書写が鎌倉時代後期に遡るのみでなく、一部ではあるが、下巻を存している。ここに従来知られなかった下巻が一部ながら出現した。下巻に残る詩歌は六〇首であるが、本稿に取り入れるべき新出の、かつ平治以前（一一五九年以前）の作は一聯である。

一

体裁は『日本詩紀拾遺』に倣い、天皇・皇親・諸臣・僧・作者未詳に分け、五十音順に配列した。名は音読する（例、大江以言は「おおえのいげん」）。

人名の下の（ ）に入れた数字は『日本詩紀拾遺』の

ページである。これがなく、作者略伝のあるものは『日本詩紀』『日本詩紀拾遺』に入集のない人物である。

引用書目（五十音順）

佚名漢詩集断簡（伝源頼政筆） 佐藤道生「漢詩文・漢

文学」（『日本文学史 古代・中世編』ミネルヴァ書房、

二〇一三年）

小野僧正祈雨之間賀雨贈答詩 早稲田大学図書館蔵

（参考） 後藤昭雄「早稲田大学図書館蔵『小野僧正祈

雨之間賀雨贈答詩』をめぐって」（『本朝漢詩文資料

論』勉誠出版、二〇一二年）。

弘法大師行化記（真福寺蔵） 『弘法大師伝全集』（ピタ

カ、一九七七年復刻）。

作文大体（真福寺蔵） 真福寺善本叢刊『漢文学資料集』

（臨川書店、二〇〇〇年）「解題」（山崎誠）

四季物語（東北大学附属図書館狩野文庫蔵） 『鴨長明全

集』（貴重本刊行会、二〇〇〇年）

詩集 徳川ミュージアム蔵

（参考） 後藤昭雄「平安朝詩拾佚―彰考館文庫蔵『詩

集』から」(前掲『本朝漢詩文資料論』)。

菁華抄 石川武美記念図書館蔵

(参考) 後藤昭雄『菁華抄』(二)、『成城文藝』第
二二四号、二〇一三年)。

摂州金龍寺縁起 早稲田大学図書館教林文庫蔵

(参考) 湯谷祐三「早稲田大学図書館教林文庫蔵」撰
州金龍寺縁起』について—中世の説話集における千
観』(『名古屋大学国語国文学』第八七号、二〇〇〇
年)。

大安寺崇道天皇御院八島両処記文 醍醐寺本諸寺縁起集

(藤田経世『校刊美術史料寺院編』中央公論美術出版、
一九七二年)

朝野群載 東山文庫本・慶長写本⁽¹⁾

天喜詩合 群書類従卷一三四

内宴記 田安德川家蔵『内宴記』影印(『日本漢学研究』
第四号、二〇〇四年)

(参考) 佐藤道生「保元三年『内宴記』の発見」(『中
世文学』第四九号、二〇〇四年)。

本文の判読について本間洋一氏の教示を得たところが
ある。

和漢兼作集卷下 冷泉家時雨亭叢書『和漢朗詠集 和漢

兼作集 尚齒会和歌』(朝日新聞社、二〇〇五年)

(参考) 翻刻) 後藤昭雄『和漢兼作集』下巻の基礎
的考察』(前掲『本朝漢詩文資料論』)。

和漢兼作集断簡 田中登『平成新修古筆資料集』第二集

(思文閣出版、二〇〇三年)

●天皇

一条天皇(三)

寒近醉人消

一歳驚寒嚴氣新 由来消得醉鄉人

氷霜豈積開眉处 風雪未侵太戸辰

阮籍林辺忘暮律 嵇康杯裏遇陽春

初知神用兼成礼 莫導芳筵四字頻

(佚名漢詩集断簡)

●皇親

早良親王

光仁天皇皇子。母は高野新笠。桓武天皇の同母弟。

天応元年(七八一)桓武の即位に伴い、皇太子とな
るが、延暦四年(七八五)の藤原種継暗殺事件に関係

したとして廢太子となり、自ら飲食を断つて没した。

天平勝宝二年（七五〇）—延暦四年。

（失題）²⁾

世路多是冷 榮石復無常^{〔名〕}

二三我弟子 別後会西方

（大安寺崇道天皇御院八島両処記文）

輔仁親王（四）

依旧有春心

隋家堤廢柳猶緑 石氏園荒花独紅

（和漢兼作集卷下）

於陶化坊亭即事

柳樹牆斜山影近 蓼花岸旧水声微

（和漢兼作集卷下）

●諸臣

淡海三船（四六）

踏歌章曲³⁾

我皇延祚億千齡

元正慶序年光麗 延暦休期帝化昌

百辟陪筵華幄内 千般作樂紫宸場⁴⁾

我皇延祚億千齡

人霑湛露帰依徳 日暖春天仰載陽

願以佳辰掌樂事 千々億歳奉明王

（朝野群載卷二十一）

大江以言（二七）

（失題）

宮碁数局嬾方歇

（菁華抄卷三）

惟良春道（八七）

和海上人贈瑠璃念仏珠滋中使之作⁴⁾

見此瑠璃色 知老道者情

携来持誦処 心仏念中生

（弘法大師行化記）

菅原文時（一三）

(失題)

残月一弓懸

(四季物語十月)

(和漢兼作集卷下)

平定親 (三六)

夏日陪北野聖廟聽法華經

廟庭幽処影堂裏

自且講經至日斜

已以善根廻向了

法華定混昔文華

(詩集卷十七)

菅原輔正 (一六)

不堪賀雨之懷、敬以一絶、奉呈醍醐元閣梨⁽⁵⁾

炎風久扇火雲生 誰望田園不結愁

云有閣梨分法雨 先知井邑大誇秋

高僧伝云、天下炎旱、沙公呪

龍下鉢中。天即雨大有^レ秋^{云々}。

閣梨是則沙公再生也。仏法不

誑人、意[□]信而已。

(小野僧正祈雨之間賀雨贈答詩)

この詩は『詩集』(引用書目)参考)にも採録される(ただし

末尾の注記はない)。詩題の「元」はこれにより改めた(もと

は「元」)。

平親範 (一〇七)

大原禅居偶吟

宮闕拜趨多日夢 山林止住九年春

橘広相 (六)

送然和尚「帰」南岳詩

雖恋白蓮清淨理 尚迷紅槿刹那華

今朝拜別尤慙愧 三教指帰註未成⁽⁵⁾

(小野僧正祈雨之間賀雨贈答詩)

後聯は『弘法大師行化記』にも引く。() に入れた傍記および

び詩題はこれに拠る。なお、詩題の「帰」は意によって補う。⁽⁶⁾

藤原伊通 (一一六)

七言、早春内宴侍仁寿殿同賦

春生聖化中^以心製一首^以韻

聖皇德化是明哉 中殿春生往事来

布政庭霑逢雨露 招賢砌馥得塩梅

鳥歌声列伶人座 蝶舞曲加妓女台

幸侍旧今詩酒宴 醉恩被寿十千廻

(内宴記)

運転老将至

昔遊鬻舍花紅日 今住香山月白秋

(和漢兼作集卷下)

藤原惟俊 (一一二〇)

(同前)

春生中殿幾千廻 大紀滂流聖曆開

温煦無私銷宿雪 羲和遍及改寒灰

花知恩沢不言吹 鳥向仁風從遠來

何只韶光誇厚德 涯塗斑白飽榮哉

(内宴記)

藤原雅教

北家師通流。師通の孫で家政の子。正三位、中納言
となるが、永万元年(一一六五)出家。永久元年(一

一一三) — 承安三年(一一七三)。

七言、早春内宴侍仁寿殿同賦

春生聖化中為韻 聖化施中今感催

春生今日改寒灰 仁風緩扇凍旁開

惠露遍霑花始綻 鳥指禁林歌德來

蝶尋御苑馴恩至 幸遇明時興此宴 熙々有樂得登台

(内宴記)

藤原永範 (一一二二)

(同前)

聖化新中喜氣催 春生治世甚康哉

鶯歌有道辭谿出 花任無偏每樹開

暖雨均恩旁年遍 和風扇德自東來

幸逢我君崇文日 仁寿殿前列上才

(内宴記)

藤原義忠 (一三八)

山家

適有京華芳契客 門前按轡一來尋

(和漢兼作集卷下)

藤原顯業（五一）

偶成

老樹成村護寂寥 想應溪友乏相招

春來暴漲流將去 下見門前獨木橋

（詩集卷二十一）

元旦

微官此外又何求 寒暖往來心即休

聖代移來多雨露 仙台新見五城樓

臻時玉女裁春服 万国衣冠拜冕旒

尤是詩篇渾漫興 閑雲潭影日悠悠

（詩集卷二十一）

藤原顯長（一三〇）

七言、早春內宴侍仁壽殿同賦

春生聖化中以來 唯樂箇中春始來

明時聖化一千廻 沢無涯岸凍先開

仁及乾坤風暗暖 鳥聲歌德和琴曲

花醉恩入酒杯 猶悲鶴望隔鸞台

勅喚云臻雖侍宴

藤原公通（一三一）

（同前）

春生聖化得時哉 料識箇中改律灰

惠沢余流水解去 仁山細黛雪晴來

枝条恩遍柳無嬾 遠近德馨花始開

逐昔我君今夜宴 年華不限幾千廻

（內宴記）

藤原光賴（一三三）

（同前）

明王聖化世康哉 春色箇中喜氣催

草樹戴恩花始咲 飛沈馴德鳥先來

四山風景歸仙殿 万戸陽光奉帝台

儻侍重闈温故宴 可言一遇連千廻

（內宴記）

藤原資長（一三九）

山中有仙室

巖室望雲宜指点 溪門逢鶴告来由

(和漢兼作集卷下)

藤原資隆 (一四〇)

遊東山古寺

幽洞交親双白鶴 禪庵故旧一青松

(和漢兼作集卷下)

藤原実行 (一四一)

七言、早春内宴侍仁寿殿同賦

春生聖化中以紫 製一首為韻

春光生処改葭灰 聖化斯中花始開

出谷鶯声歌德否 跨林霞色醉恩哉

柳摇胡塞塵猶靜 水解舜河潤遠来

老在渭陽宜作愍 戴頭霜雪白皚々

(内宴記)

藤原守光 北家真夏流。盛仲の子。従五位上、大内記、大監物

となる。生没未詳。

(同前)

春生何地最先催 聖化遍中心悅哉

花自薰風吹処綻 氷当就日照時開

漸歸雁陣馴賓服 既出鶯兒慣子来

謬侍宸遊恩喚末 不凶只登見皇白

(内宴記)

藤原周光 (六〇)

(同前)

聖化堂々被九垓 春生簡裏變葭灰

仁風旁午進場報 韶景從東就日来

堯帝垂衣霜マツ一片 萊夷実服鳥音催

白頭償尽崇文德 豫宴寧非老幸哉

(内宴記)

藤原俊憲 (一五〇)

(同前)

春生聖化世康哉 相樂意同李老台

風属垂衣声渐暖 鳥馴諫鼓曲初来

恩榮發得花繁艷 雨露浴将木不才

官職於臣往過分 豈凶斯宴侍蓬萊

(内宴記)

第二聯は『和歌色葉』により『日本詩紀拾遺』(一五〇頁)に
既取。

古松不記年

山經豈載託根日 墳典未詳傾蓋時

(和漢兼作集断簡)

藤原信重 北家日野流。もと親業。従四位上、大内記、大舍人

頭。

七言、早春内宴侍仁寿殿同賦

春生聖化中以采為韻 聖化明中迎暖哉

春生喜氣暗相催

句雨染煙新挺草 薰風扇雪且開梅

通峯みさき霜色醉恩聳 出谷鶯声歌德来

唯悦我君令賜宴 不然爭得入蓬萊

(内宴記)

藤原正家 (四六)

地静只看花

荆門人跡空对雪 松戸日長独望春

(和漢兼作集卷下)

藤原成光

式家。敦光の子、有光、永光(長光)の兄弟。正四位下、式部大輔、文章博士。天永二年(一一二一) —

治承四年(一一八〇)七月十八日。

七言、早春内宴侍仁寿殿同賦

春生聖化中以采為韻 聖化滂流德不回

仁風山暖雪先尽 春生景色自東来

仁風山暖雪先尽 恩沢雨余花始開

鶯囀虞琴応昆曲 霞濃堯酒欲斟杯

幸逢我君崇文学 半白登仙到露台

(内宴記)

藤原忠通 (八三)

(同前)

中殿春生楽幾廻 不図聖化一時催

花将殊俗嚮風媚 鶯是遺賢歌德来

隴塞境交朝雪淡 昆明水暖暎水開

文才糸管用能席 選入猶非老幸哉

(内宴記)

藤原長光（一二二）

（同前）

我君聖化信康哉 唯有春生今盛催
柳嚮仁風塵尚靜 水当就日凍先開
醉恩花色点林咲 歌德鶯声辞谷来
斯宴旧儀今繼絶 長元以後百余廻

（内宴記）

藤原朝隆（一六三）

（同前）

聖化無偽遍九垓 春生喜氣箇中催
氷逢就白東先解 花染薰風南早開
君与群臣迎節樂 時求同類感仁来
老者遺賢豈非幸 侍宴歡情勝上台

（内宴記）

藤原敦周（一六六）

七言、早春内宴侍仁寿殿同賦

春生聖化中_{為韻} 製一首_{以來}

春生吹律改緹灰 聖化洽中其悅哉

五日風閑花漸綻 千年水變凍初開

堯曦照物蟄虫振 舜樂和音啼鳥来

幸繼長元曾祖業 不囟此席接賢才

（内宴記）

藤原範兼（一六八）

（同前）

春生可樂寔康哉 化洽一從聖曆開
為湛恩波先減凍 依留瑞雪半藏梅
辺城嫩柳向風靡 禁苑新鶯將鳳来
謬入冢闌迷子細 不知昆閬等蓬萊

（内宴記）

藤原隆方（四一）

松月夜涼生

蒼々松月足沈吟 良夜涼生鐘漏深
露葉變霜無暑氣 風枝帶雪有秋心
嵇公粧映夜初薄 丁氏夢晴汗不侵
今望君子遐齡樹 雲路長期万歲陰

（天喜詩合）

高島要『日本詩紀本文と総索引本文編』（勉誠出版、二〇〇三年）「解説」の指摘により補う。

源 為憲（二八）

去年春、參州府君以旧侍中勞
拜除。時人以為抽賞至矣。今
年春、僕以前刺史功拜任。天
下亦称採択明焉。同類相求、
古男右之謂也。府君闕除書後、作
長句詩一篇、相賀之。待僕之
蒞境、幸被視其草。嗟乎、二
人同心、兩州接境。不堪默止、
試押本韻。⁽⁷⁾

近境歛娛奈意何 古今昵友亦無他
同追諷習孫文宝 各慕清康馬伏波
我得詩華新握玩 君看符竹暗謳歌
東山東海道雖異 共遇明王感化多

（詩集卷十四）

（和答隨喜十願之偈作）⁽⁸⁾

慈悲佳句任恣吟 一繼孫家擲地金
婦願化城蹤遠過 結緣朽宅戲先禁
君終他界明行足 我亦此生初発心
看取大師甚深誓 娑婆再似遇觀音

（撰州金龍寺縁起）

次頁の千観の詩に対する和詩。詩序を付す。（ ）に入れた詩
題はこれに基づいて私意により補ったものである。

源 経信（六四）

水仙花

上苑新開冰玉姿 都疑朝露洗臙脂
桃前梅花迎春早 一種風流入野詩

（詩集卷十八）

源 師時（一八〇）

人家有來客、休息于新樹下
林亭我醉独吟嘯 池榭客來共眺望

（和漢兼作集卷下）

源 師頼（一八二）

山居

野徑雨霑春草綠 山郵雲薄夕陽紅

(和漢兼作集卷下)

補ったものである。

蓮禪 (八四)

閑居偶吟

兔裘旧卜残苔地 人事秋稀五柳家

(和漢兼作集卷下)

●僧

元杲 (一九〇)

奉和

適有密雲含雨浮 炎天自解万人愁

神泉苑裏祖師跡 弘法大師、昔於此處始修此法 覆薄遙祈堯日秋

(小野僧正祈雨之間賀雨贈答詩)

前掲 (40頁) の菅原輔正の詩に対する和詩である。

千観 (一九六)

(答源澄才子随喜十願之偈)⁽¹⁰⁾

讀文一卷漸沈吟 玉韻鏗鏘直可金

句々断腸神不靜 行々催感淚無禁

菩提道遠艱難思 生死海深老少心

君若出塵完此誓 定聞西界世雄音

(撰州金龍寺縁起)

詩序を付す。() に入れた詩題はこれに基づいて私意により

●作者未詳

(失題)

六十余翁百事慵 喜求妙法此相逢

散為甘雨霑孤遍 凝作慈雲影幾重

多少赴機応信仏 自他得益豈徒龍

唯嘲臨暮歸漢色 漫礙一声度嶺鐘

(作文大体 真福寺本)

(失題)

秋月蒼々遠漢晴 亦如佳妓樂中清

兔耀蟬鬢嬋娟思 桂影花容窈窕情

暗粉鏡明臨水曉 綺羅帳透陰雲望

寄言形勝風流地 蓮府遙期万歲榮

(作文大体 真福寺本)

(失題)

桂生三五夕 冀開二八月

(作文大体 真福寺本)

廻文詩

春風是解凍 夜月只敷霜

(作文大体 真福寺本)

女踏歌章曲七首⁽¹⁾

明々聖主億千齡

無事無為唯賞予 凝旒端拱任群賢

網疎刑措還千古 治定功成太平年

明々聖主億千齡

深仁潛及三泉下 鴻德遐充六合中

悦以紀民民悦服 (一句欠)

明々聖主億千齡

上月韶光早先春 階前細草綠初新

南山雪尽春峰遠 北闕煙生瑞氣淳

明々聖主億千齡

君王曉奏旒蘇帳 春日芳菲遣興催

曉光遍着青桜柳 寒色金舞玉砌梅

明々聖主億千齡

宮女春眠常嬾起 被催中使絵粧成

雲鬢尚恨無新樣 霧縠還嫌色不輕

明々聖主億千齡

春歌清響伝金屋 双踏佳声繞玉堂

借問曲中何憶有 仙齡延祚与天長

早年愛光華

春遊不知厭 暮景落朱顏

猶恨韶光短 徘徊不欲還

(朝野群載卷十三)

『日本詩紀』あるいは『日本詩紀拾遺』に既に採録されている詩句についての補訂。

藤原菅根（一四）

重陽後朝眺望

泛秋水

昨朝北闕見神仙重陽待宴、觀
奏霓裳羽衣曲 今日西河賞晚煙

不覺応為星漢客 舟行暗渡水中天

望秋山

千重澗戸懸紅葉 百丈山腰帶白雲

欲趁赤松巖下駐 還愁秋桂動移文

紅葉落

露染霜侵又得風 可憐紅葉滿晴空

飄零岸上都無限 綠水流將晚浪紅

菊花殘

愛菊逆流日漸斜 重陽明日折殘花

兩三黃朶知何処 应是陶潛沢畔家

『日本詩紀拾遺』に「藤原行成筆詩懷紙」に拠って採録したが、これには作者の記載がない。したがって「作者表記を欠くもの」の項に置いたが（二〇五頁）、『詩集』に藤原菅根の作として引く。

藤原敦宗（四五）

北野聖廟講法華經

德輝暫隱知非実 応似靈山秋日円

『日本詩紀』に『教家摘句』（『泥之草再新』）に拠って採録するが、作者表記が「正四位下行式部権大輔兼大学頭丹波守」と氏名を欠くために「無名氏」の項に置く（四五三頁）。しかしこの官位の記載と詩題とによって、作者は藤原敦宗であることが明らかになる（拙稿「北野作文考」『平安朝漢文文献の研究』吉川弘文館、一九九三年。一九一頁）。

菅原定義（三三）

夏日陪北野聖廟聽法華經

去年冬景飛言葉 今歳夏天聽法華

応是神威兼内外 抽誠各供廟門霞有注

藤原義綱(一二七)

(同前)

法水清流与道新 聴来終日洗心塵

廟前詩客今為導 皆作靈山会裏人

源 資宗(一八三)

(同前)

会同聖廟孔門客 得聴一条義甚深

今向松風靈幹導 神恩難報只專心

この三首は『日本詩紀拾遺』に東大寺図書館蔵『願文集』に拠つて採録したが、傍線部が蝕損により欠けている。それを『詩集』によりこのように補うことができる。

付 『日本詩紀拾遺』の補訂

拙稿「日本古代漢詩集成のこれまでとこれから」(伊井

春樹先生御退官記念論集刊行会編『日本古典文学史の課題と方法』和泉書院、二〇〇四年)に付したが、これを『本朝漢詩文資料論』に収めるに当たっては、本稿に転載することを期して、削除した。そこで、以後に気づいたものも含めて、ここに付す。

まず、大きな誤りが五つある。

一頁上、大江朝綱の詩として「僧綱牒紙背」所収の「仲」秋釈奠聴講左伝同賦学後入政」一首をあげているが、これを一二頁上の大江維時の項へ移す。

三二頁上、「(七夕)」題の「曾随織女渡天河 記得雲間第一歌」を削除する。これは劉禹錫の「聴旧宮中樂人穆氏唱歌」(『劉禹錫集』卷二十五)の一聯である。(北山円正氏教示)。これに関連して「引用書目」六頁および二五三頁上の「続新撰朗詠集」を削除する。

三九頁下、「重以奉呈門下侍郎」一首を一九一頁下、慶命の項へ移す。

一〇一頁下、菅野惟肖の項をすべて削除。この詩は『日本詩紀』(二三三頁上)に採録されている。これに関連して二一五頁下の「惟肖(菅野)」を削除。

一二三頁下、「禁庭催勝遊」一首を削除。これは高倉天皇

の作（仁木夏実氏教示）。

その他の補訂。

三八頁下、「卯花開墻」↓開。

五四頁上、「三月三日同賦勸醉是桃花」の第五句、外、飲応

催粧媚暁↓卯（佐藤道生氏教示）。

一〇二頁上、「山明望松雪」の第四句、塵尾斜傾帶玉陰↓
塵。

一一四頁下、「奉和坂將軍……」の第四句、年□幾度世門
人の□は空格にする。

一六一頁下、「弥陀嶺上……」の句の前行に詩題として、

「藤貢士宗友恋恩容、詣其（為隆）墳墓、落教行之涙、詠
一句之詩曰」を補う。

一二七頁上、於室泊即事……八五↓四。

一三一頁下、講釈迦仏……八四↓五。

一三二頁下、講仏舍利……八四↓五。

一三四頁上、秋色滿江湖……八四↓五。

二四二頁上、卯花開墻↓開。

「卯花開墻」の次に「卯杖……三八」を立項
する。

二四二頁下、虫上狹渡上古寺……八五↓四。

二四七頁下、尚齒会……「一二四」を削除。

二五五頁下、第1行、八四↓五。

注

(1) 他に三条西本・今出川本・尾州家本・林崎文庫本も併せて校合し、この二本に拠った。諸本の調査については佐藤道生氏、高田義人氏の高配を得た。

(2) 拙稿「古代漢詩集成のこれまでとこれから―拾佚詩五首」
〔本朝漢詩文資料論〕勉誠出版、二〇二二年〕参照。

(3) 拙稿「踏歌章曲考」〔仁平道明編「源氏物語と東アジア」
新典社、二〇一〇年〕参照。

(4) 注2に同じ。

(5) 拙稿「早稲田大学図書館蔵『小野僧正祈雨之間賀雨贈答
詩』をめぐって」〔前掲「本朝漢詩文資料論」〕参照。

(6) 注2に同じ。

(7) 拙稿「平安朝詩拾佚―彰考館文庫蔵『詩集』から」〔前掲
『本朝漢詩文資料論』〕参照。

(8) 注2に同じ。

(9) 注5に同じ。

(10) 注2に同じ。

(11) これについては、『朝野群載』の東山文庫本、慶長写本の
ほか、注1の諸本を校合し本文を校定した。なお注3
の拙稿参照。